「都市の酪農を守るには」

神奈川県立相原高校
畜産科学科　2年　菅原　礼太郎

私は、小中学生のときまで毎日野球に熱中していました。いつも自分の元気の源となっていたのは練習後にほおばるお肉やごくごく飲める牛乳、濃厚なうまみが口いっぱいに広がるチーズやヨーグルトなどの乳製品でした。そんなときこれら乳製品などの畜産物はどのように生産されているのだろうと思い、食に関する未知の領域を学ぶために相原高校畜産科学科に入学しました。私の所属している畜産部は、6年前から毎日休まず食料生産に力を入れている部活動です。入部してから、いつも顧問の先生や先輩の背中を追いかけながら一生懸命取り組み、これはもう地域の食を守る生産農家顔負けの部活動といっても過言ではありません。しかし、畜産に関する知識のない私は驚きの連続でした。家畜を扱う畜産部には全く休みがなく、1頭の乳牛から約30kg以上、つまり牛乳パック30パック以上もの牛乳が毎日毎日生産されること。家畜が食べる粗飼料も積極的に栽培、調製、給与していること。生産物をそのまま、もしくは付加価値をつけるために企業と連携し、商品を地域社会へ普及販売活動を行うなど、生産現場から食卓までの一貫した取り組みが、食の架け橋となっていることなど、この活動の奥深さに魅せられ、引き込まれていく自分がありました。

これまで自分達で栽培、調製した粗飼料を給与して生産された牛乳を始め、受精卵移植技術による牛群改良を行ったブランド牛、「相原牛」の牛肉や企業などから排出される食品残渣を利用した「リキッド発酵飼料」による低コストに生産された「あいはら豚」の豚肉、地域から排出される食料残渣を有効利用し自分達の手で調製した飼料を給与して生産された鶏卵などを定期的に地域の消費者の方々に提供してきました。その結果、日本農業賞特別部門「食の架け橋賞」をはじめとする、数々の栄誉ある賞をもらうことができました。これができるのも、相原高校の抜群な立地条件を生かした都市型農業にあり、大量消費地に近い農業地域で、地元に新鮮で安全、安心な生産物を供給するとともに、直売所を通して消費者とのつながり、顔の見える農業という信頼関係を構築できることが利点です。その反面では近年、農地の減少や糞尿による環境問題などさまざまな要因で都市型農業が減少傾向にあり、このままでは、身近な食料生産が衰退してしまう。そんな風にいつしか考えるようになり、これを継続していくことが私たちの責任だと思うようになりました。

その責任を果たすため、私たちは全国的に搾乳をやめていく農業高校が増加する中、昭和30年代まで生産し販売されていた「相原牛乳」の瓶の発見から、もう一度復活したい！という思いから牛乳生産を試みることにしました。私たちは、少ない農地をフル活用し、イタリアンライグラスやデントコーンなどを使用した乾草やサイレージなどの粗飼料を約50％まで自給し、さらに近年、休耕田や耕作放棄地の活用方法として最適の作物と言われている飼料

イネの栽培も積極的に行いました。そして、一頭の乳牛を導入。牛乳生産を可能としました。しかし、当初の牛乳生産は困難を極め、1時間手搾りしても終わらない。牛乳の冷却保存などの酪農機器は一つもなく、販売すらできない状況に陥りました。どうしても、販売したい！そんな私たちの強い願いをしっかりと受け止めてくれたのは顧問の先生でした。休日には、県内外を問わずほとんどの乳業会社や酪農家に委託先を探すために奔走し、やっとの思いで本校のOBが経営する牛乳工場と出会い、ミルカーやバルククーラーなどの酪農機器もOBから寄付をいただきすべてそろえることができました。このように、先輩方や先生のおかげで搾乳の効率はぐんと上がり、より衛生的な環境を整えることができました。現在、牛乳販売は毎日行われ、消費者から「この牛乳は甘くておいしい。」「生徒が搾ってるから安心して飲める。」とうれしい評価が今まで感じたことのないやる気につながっています。顧問の先生も、これから目指すべき農業は、積極的な飼料生産から食卓に上がるまで、生産者と消費者が対話できる農業を推進することにあると指導しています。

そのことを踏まえて、私の考える理想の酪農。それは、まず全国的に大規模酪農が進む中、生産者が搾った牛乳が消費者の手に渡るまですべて生産者が関わること、また牛乳を生産するうえに必要不可欠な粗飼料を積極的に自給することです。まずは自分の手で搾った牛乳は最後まで責任をもって消費者に提供するのが何よりも大事だと私は考えます。しかし大規模酪農を行う農家が増加する中、大量の牛乳を生産者の手で消費者に提供するのは困難を極めます。なので私は消費者の方々がすぐ近くにいる都市型近郊で行う酪農が重要だと考えます。生産者側の利点としては消費者の方々がすぐそばにいるので、商品も販売しやすくまた、消費者の方々のニーズを直接聞くことができます。さらに牛乳を加工して販売することにより、アイスクリームなどの子供から大人まで幅広い年齢層に人気のある商品を付加価値をつけて販売できます。消費者側の利点としては、生産者がすぐそばにいるので、自分達の要望を生産者に言うことが手軽にできるし、なんといっても消費者はすぐそばで生産しているということで、より安心感をもって生産物を消費することができます。さらに農地が減少している現代ですが、飼料をできるだけ自給することにより、生産者側としてはコストの削減につながり、消費者側では、自分が食べている生産物が何を食べて育っているかなど知ることができるので、より一層、生産者と消費者の信頼関係を構築できます。また中国や台湾などの海外からの輸入飼料が原因のひとつとして考えられる口蹄疫をはじめとする伝染病も減少させることもできます。二つ目は生産者と消費者が対話し理解し合える酪農です。都市型酪農を営むにあたり、環境問題も問題になってきます。堆厩肥の臭いや家畜の鳴き声、これらに対して消費者はとても不快に感じると考えられます。しかし畜産に臭いや鳴き声は切っても切れないものです。これらをいかに消費者は理解してくれるか、また生産者はこれらをどこまで対処、防止できるか。今の都市近郊で営む畜産の問題でもあります。ですがこの問題を

解決するのはとても困難です。残念なことにこれといったすばらしい解決方法は今のところありませんが、そのかわり地域の方々や小・中学校に堆厩肥などを提供することができます。解決はできませんが、地域の方々に少しでも理解してもらえる活動を行っていけば、消費者の方々にこの問題を理解してもらえると考えます。

両親に感謝しながら、野球に熱中できた小中学生のころ。ちょっとした疑問や興味本位で踏み込むことができた畜産の世界。そこには、あふれんばかりの酪農の魅力を学ぶと同時に、都市で消費者の方々とコミュニケーションをとりながら酪農を営む楽しさや苦労を知ることができ、近年の都市近郊で営む酪農の問題について真剣に考えることができました。私はこの問題を解決し自分の理想を現実に変えようと努力し、日本の食料生産を守っていきます。そして私は必ず自分の理想をかなえられる酪農を営みたいと思います。